

科學史の材料としての俳諧

——その一 貞門——

大 矢 眞 一

によつた。

江戸時代初期の世相を知るための最もよい材料として俳諧が取上げられたのは、既に江戸の末期に於てであつて、柳亭種彦や喜多村信節はその著作の中でこれを盛んに利用してゐる。現代に於ては新村出博士が南蠻研究のためにこれを用ひられてゐるのは著名なこと、博士には俳諧の中から抜いた異國關係の句の集成に同じ種類の和歌等を加へた『異國情趣集』なる著書も存在する。

従つて俳諧の中から科學史の材料を拾ひ出さうとする私のこの計畫は創意の點に於て見るべきものなく、單に努力の問題であるとも言へるし、加之その中には外國に關係するものが相當に含まれる爲に、その部分では『異國情趣集』の材料と重複するものも多く、この點から見れば、この小文の價値のあまり大きくないことは私自らが認めるところである。しかし從來の科學史で斯様な材料を使用したものはないやうであるから、これも全く存在の意義を持たないわけではない。

調査した俳諧集は次のやうなもので、最後の一つを除いては、すべて春秋社刊『日本俳諧大系』の中「貞門俳諧集」所收のもの

- | | | |
|--|--------------|---------------------|
| 俳諧之連歌獨吟千句 | 寛永田守武 | 天文九年成、慶安五年板 |
| 新撰大筑波 | 山崎宗鑑 | 享祿四年或は天文十八年撰 |
| 新増大筑波(油糟・淀河) | 松永貞徳 | 寛永二十年板 |
| 紅梅千句 | 松永貞徳 | 明暦元年板 |
| 鷹筑波 | 松永貞徳 | 寛永十五年跋、寛永十九年板 |
| 玉海集 | 安原貞室 | 明暦二年板 |
| 山之井 | 北村季吟 | 慶安九年板 |
| 俳諧初學抄 | 齋藤徳元 | 寛永十八年板 |
| 俳諧之註 | 松江重頼 | 寛永十九年板 |
| 歌仙そろへ | 山岡元隣 | 寛文六年板 |
| 毛吹草 | 松江重頼 | 寛永十五年序、正保二年頃刊(岩波文庫) |
| 毛吹草追加 | 正保四年刊(岩波文庫本) | 『毛吹草』附載) |
| 貞門俳諧の祖先たる守武の『俳諧之通歌獨吟千句』の成立は天文九年(二二〇〇)、西洋人の初めて我が國に渡來した前年である。宗鑑の『新撰大筑波』の作られたのも大體その前後であらうと考 | | |

へられてゐる。そして貞門の名の基く所の松永貞徳の最も活躍したのは、これから百年近く後の寛永年間であり、この派の俳諧集は多く寛永の後半に刊行されてゐる。寛永十六年（二二九六）は鎖國令の下された年である。この派の俳諧は寛文（二二二一—二二五三）には既に下火となり、延寶（二二三三—二二四一）に至つて談林派の全盛時代となつてゐる。即ち貞門の俳諧の存在時期は外國との交通の最も盛んであつた時代と大體重なり合つてゐるのであつて、従つてこの派の俳諧集の中に異國に關する事柄を詠んだものの多いことも極めて當然であり、これは決してある一個人だけの好みといふわけではないのである。

1

毛吹草は俳諧の作法の書物であるが、その卷三は「付合」となつてゐて、俳諧に用ひる言葉をいろは順に並べ、その各語の下に、それから聯想される言葉を列挙して、句の付合せに便してゐる。即ちこの派の俳諧に於ては、後の蕉風などとは異つて、主としてかかる具體的な聯想によつて句を次々と順に續けて行つたもので、所謂「形付け」である。今その「富貴」の項を見ると、

富貴——神農、牡丹、鯨つく浦、金山、都、城下、舟の津（最初は伏羲神農の洒落、次のは富貴花は牡丹の異名）

の如くなつてゐる。この鯨つく浦以下の富貴繁榮する場

所のすべては、この時代の大きな特徴を表はしてゐるのであるが、その最も著しいのは、舟の津であらう。

嬉しくも涙に漬きし舟子ども

（玉海集）

數の寶を入るる箱崎

のぼりぬる糸巻物に利の有りて

（紅梅千句）

繁昌しける長崎の町
の如く、外國貿易のために、幾つかの港は非常な繁昌を始めた。

唐にもまさる日本なりけり

（廣筑波）

箱崎のあけくれ馴るる妻子ども

の如く、外國人もそこに居住した。そして外國からは珍奇な動物や物品などが盛んに輸入せられた。當時の人々が之に示した關心の強さは我々の想像以上であるらしい。

かしらも頼もぬれ渡りけり

（新增大筑波）

獅子野牛さても書いたる油畫に

野牛＝山羊

かしらぬらしてつつと入りけり

（新增大筑波）

水牛は水の底をや潜らん

前者は明瞭に油畫であるが、後者もやはり繪の中の有様であるらしい。

ひたすら鼻の垂るぞいぶせき

飼置きし象は意もふとりいで

は噴飯すべき空想であるが、

ゆるりとゐては又かしこまる

しほらしや羊の子供乳を吞みて

は或は實見した景色と考へられなくもない。しかしこの

頃の輸入動物で最も人氣のあつたのは鸚鵡であらう。

笑へば笑ふ、泣けば泣くなり

いかなれば鸚鵡は人の眞似するそ

興を催す人の口眞似

見物も多き鸚鵡の放し飼

の如く鸚鵡を詠んだものは少くなく、また

誰いふとなく知るる密夫

飼置きし鸚鵡の鳥の鑿立てて

の如く想像を逞しくした句も見える。

植物の中で目立つものには葡萄がある。

葡萄をも出すやつるがの市の棚

かん鍋の裏にもなるや葡萄酒

煙をする葡萄酒とは一體どんなものであつたらう。

この時代のはじめに入つた砂糖、木綿、煙草等の品々

も僅かの間に必需品となつてしまつた。

それはまい、これはあまくや聞こゆらん

(玉海集)

(新増大筑波)

(新増大筑波)

(鷹筑波)

(玉海集)

(玉海集)

(毛吹草追加)

ただのまんぢう、さとうまんぢう

「まい」と「あまい」に對す。多田の満仲は舞の題名。

熱帯に水砂糖や通ふらん

ぜんざい多く食へどたため

弓の紐こそほぼけたりけれ

唐綿を幾度となく打ちつらん

綿ならぬ物は我等が身にそまず

にが／＼しくも尊とかりけり

皆人の参るや露の塔供養

たばこ法度の春の山寺

當世露の露をたばこの代に吞む故なり。

たばこにや吞みて煙をふきのたう

露際までたばこを好ける人心

元和二年(二二七六)に煙草栽培及び賣買の禁令が出た

が、その頃には多くの人が露などを代用しなければなら

ないほど煙草は生活に缺くことの出来ないものになつて

ゐたのである。この露の葉は現代でも東北地方で煙草の

代用として用ひてゐるといふ報告がある。

かうして人々の生活の内容は次第に豊富になつて行つ

た。

港と共に國々の城下の町も次第に大きくなり、益々榮

えて來た。そして中でも京都の繁榮は目ざましかつた。

我身ながらも尊くぞある

神國の帝都にしかも生れ来て

(新增大筑波)

といふのは恐らく當時の人々の實感であつたに相違ない。
そしてそこには三階建や四階建の家もあつたもののやうである。

あぶなくもあり、めでたうもあり

新宅の三階四階みせられて

(新增大筑波)

花車なる人の有得なる秋

三階や二階の上の月見して

(紅梅千句)

かうした家には硝子障子さへ用ひられたらしい。

びいどろの障子に玉更ぎえかへり

玉鬼二月

火ともしの火や更けて消ゆらん

(紅梅千句)

勿論何でも一般人がかかる生活を望むべくもないが、しかしそれはそれなりに矢張り新しい文化の恩澤を或る程度に於ては受けたことと思はれる。例へば毛吹草の付合の中では「洗濯」の聯想語として「灰汁」と並んで「しやぼん」が挙げられてゐる。又、蟲除けとしての樟腦について次のやうな句がある。

樟腦か虫の福れる野邊の霜

(玉海集)

水に火は生蟲なれや飛ぶ螢

(毛吹草)

前者は蟲の弱るといふことから野邊の霜を樟腦に見立て

科學史の材料としての俳諧(大矢)

たのであるから、當時は樟腦を粉末のまままで紙に包んで用ひたのであらう。後者の示してゐる水に浮かせた樟腦に火をつけて水上を走り廻らせる遊びは今も行ふところである。

天の時は地の利にしかね米室^いかな

(玉海集)

米室は古くからあつたが、一般的に恩恵を受けられるやうになつたのは此の頃からであらう。地の利にしかずと云つてゐるが、しかしその心の底には恐らく人の力を一掃^いくべきものに考へてゐたのではあるまいか。

鑛山もこの時代に多く開發され發展した。これを反映して

かな山のまぶと申すかはれ心

(新增大筑波)

つるにつかば掘りとれ金まぐは瓜

(鷹筑波)

銀山のほとりにて

ほととぎすあまた出づべき山路かな

(毛吹草)

のやうに鑛山用語を用ひた句が相當多く見えてゐる。恐らくこれ等の語は當時の一般の人にもよく知られる程度になつてゐたのであらう。

鑛業が發達するにつれて鑛物の業も盛んになつた。

鐵には重き輕きはよもあらじ

型一つにて鑛る數の釜

(鷹筑波)

錢二つたたらの中へ先づ入れて

(慶筑波)

長老が錢のたたらへ見まはれて

(新增大筑波)

これと共に當時盛んになつたのは金銀箔の細工である。

毛吹草の付合の中で箔(薄)に關係する項目を拾つて見

ると、

風眠ふ箱仕事。紙帳。薄仕事。金。薄。紙。薄。油。薄紙。

糊。薄細工。摺る。薄。芥子。薄粉。

の多きに及んでゐる。この仕事が當時如何ほど世人に關

心を持たれたかもこれから分るのであらう。

錢もこの時代の最初は少くて

珍らしき文字の並び讀みすま

今讀りてふ錢ぞ讀取る

(慶筑波)

の如く支那から輸入し、中には

われもわれたり、つきもつきたり

照鏡もつなげる上はよく見えて

(新增大筑波)

の如き悪質の錢も少くなく、錢を選んで請取ることが行

はれた。しかし後になり、

今使ふものも年號からげにて

いかほど持った寛永の錢

(慶筑波)

寛永通寶が作られる頃は國內の銅の産額も多くなり、逆
に支那に輸出されるやうになつた。

長閑なる漢に鯨が鹽ふきて

磯によりたる鯨いかほど

(紅梅千句)

の如き景色は處々に見られたが「鯨つく浦」では之を見
ると鯨を打つて出勤をはじめる。

大分に持つ鯨守はうらやまし

幾年往來する鯨つき

(玉海集)

鯨を取る目的の一つが油にあることは、毛吹草の付合に
も「鯨油」とあるが、疑も亦種々に使はれた。

折れず曲がらず通じざりけり

きせる洗ふ鯨のひげの短くて

(新增大筑波)

かうして鯨つく浦は富貴繁昌したのであるが、捕鯨の業
が盛んになると

波あらく鯨つく舟打ちかへり

通じかねたる口は唐人

(慶筑波)

の如き漂流談を演出することも時折はあつたであらう。
けれども此の「鯨つく浦」の繁昌はごく部分的なもの
であつて、他の「金山、都、城下、舟の津」の繁昌の影

響する所の全國的であるのに比べべくもない。

要するに此の時代の經濟の根柢には金山と舟の津とが
あつた。そして又舟の津は此の時代の文化特に科學、技
術の基礎であつた。都、城下の富貴繁昌はその結果であ

つたのである。

だが文化の發達は僅かつつではあるが全國民に浸透して行かすには置かなかつた。

百姓も理屈に好む癖の形

(鷹筑波)

嘲笑したつもりなのかも知れないが、かうして文化は次第に進んで行つたのである。

2

あき人はあらやうかましこくそかひ
かた地にぬりてをけるそろばん

といふ『鷹筑波』(寛永十五年跋)の句が國書に見えた「そろばん」の語の最古のものであることは、江戸時代に於て早く小山田與清が松屋筆記の中で注意してゐる。しかしこれより早くはないが同じ寛永十五年の序を持つた『毛吹草』巻四の「諸國名物」の中に二箇所十露盤の産地が記されてゐることは注目すべき事柄である。それは肥前(長崎であらう)と攝津の中濱(大坂)とであつて後世に有名な近江の天津は擧げられてゐない。從來我が國でのそろばんの製作は天津の片岡庄兵衛が慶長十七年長崎で支那人から算盤を買つて持ち歸り郷里で製作を始めたのが最初であるといふ片岡家の言傳へが一般に通用し

科學史の材料としての俳諧(大矢)

てゐた。しかしそれに關する古い文書は焼失せて無いといふし、その折支那人から買つた算盤であるといふ現存品が、純支那式でなく日本化されたものである點等から、この傳説はあまり信頼の置けるものではなかつた。今長崎と大坂の産物に十露盤があり、近江の産物にはそれが入つてゐない所から見ると(毛吹草の作られた京都と近江とは極く近くであり、且つ近江の産物としては相當多數の品が擧げられてゐることを考へ合せて)天津でそろばんが作られそれが有名になつたのは恐らくこれよりは後のことであると言つてよいかと思はれる。

この時代の俳諧にそろばんの出で來るのの少いのに比して算木を詠んだものは相當に多い。

秋に算すかと算置きて見る

かりがねや利をくはへつつ渡るらん

梅が枝はをのが暦の算木かな

立横に算の次第や知りぬらん

くらき戸ざしもさつと明けり

最後のは數學で錠を開ける法があるといふ當時の信仰である。

言ひたきやうにゆふ暮の空
免乞ふや算用しらぬいなば殿

寛永二年貢 (新增大筑波)

(鷹筑波)

(鷹筑波)

(鷹筑波)

すぢれもぢれる心むつかし

際目論地の割算は上手にて

露程も九九にもれたる算はなし

のやうに算用に関する句も少くないが、特に多いのは計算に関する洒落である。この中には

おもしろく思ふ十日の月見かな

(玉海集)

の如く加法(稀に減法)を利用したものと、

今朝はにんにくの十八土用かな

(鷹筑波)

(土用には蒜を食べる習慣があつた)

の如く乗法(稀に除法)を利用したものがあるが、後

者の方が遙かに数が多い。これは當時多くの人が興味を

持つたものらしく、毛吹草卷一には可_レ宜句解之品々の

中に「員數を積る(計算する)句の例」として幾つかの

作例を載せてゐる。

又當時行はれた數學遊戲の類も句の材料に用ひられて居る。例へば

「獅子立て」

月々の日や獅子立て年の暮

(玉海集)

「虎の子渡し」

初寅の子渡しや今日鞍馬山

(毛吹草)

「鼠算」

行く年を讀むや月日の鼠算

(毛吹草)

の如くであるが、最後のものは同じ毛吹草の付合の所にも「鼠算用」と出てゐるから、相當一般的になつてゐる。

たものであることが考へられる。從來鼠算は鷹劫記に於て考案されたものであるやうに説かれて來た。鷹劫記の

初版(これには鼠算等の遊戲はまだ入つてゐなかつたと

私は考へてゐるが)の刊行されたのは寛永四年、毛吹草

の序文は寛永十五年、その間にこれが俳諧の材料に用ひ

られる程までに一般的になつたと考へても勿論差支へが

ない。しかし同時に毛吹草の最初の部分には「梅櫻椿草

花に、近年それの私名多し。又諸國に於ける新地の

寺社町里の名、或は器物等、此外なにはのよしあしき俗

語に付て、いまだ一昔にもならざる事を云出づるはいか

が待らん。思惟し給ふべし。」とあることも注意せられ

る。この著者の態度から言ふと、鷹劫記にはじめて出た

鼠算であつたならば、ここに俳諧の材料として取上げる

ことはしなかつたのではないかと考へられる。この點

から、鼠算は當時世上に行はれてゐた遊戲を鷹劫記が取

入れたのであらうといふ、私の持論の、これは一つの傍

證になるのではないかと思つてゐる。

尙ほ幕末になつてから和算家が數學的に取上げるとこ

ろの、十分に酒を注ぐとこぼれてしまふ所謂「十分盃」

は談林時代になると盛んに詠まれるが、次の

十ふんにさけばこそちれきりが八(桐ヶ谷)

(毛吹草)

もやはり同じものを底に持つてゐるのではないかと思はれる。又毛吹草の付合には「天狗・投算」といふのがある。天狗の投算といふのは能狂言にも見えてゐるのであるが、果して如何なる方法なのであらうか。これについての材料をお持ちの方は御教示を願ひたい。

3

三つのさかひの道のせはしさ

油断して知れべき物か醫易曆

(新增大筑波)

の如くこの三つは當時世人から尊敬されてゐたが、同時にこの三つは大體同じ種類のものであると考へられてゐたことも興味のある事柄である。曆が易に近く考へられてゐたのは當然であるが、醫も當時は陰陽五行の説がその基礎になるものと思はれてゐた。運氣論がこの三道の人々から同じやうに研究されてゐた時代である。

勿論一般人が曆を易に近いものと考へたところで不思議はない。

入りたくもあり入りたくもなし

悪日も逢坂までは歸り来て

細工仕初めに日を選ぶなり

(新增大筑波)

科學史の材料としての俳諧(大矢)

千本ある中にまれなるささく竹

(慶筑波)

いねの數をも知れる百姓

耕をば丑寅の日に刈りまひ

(慶筑波)

の如く、凡ての事柄に日の吉凶を選び、これを曆に求めようとした。それ故

筆取もなし筆取もなし

かな曆多くの事を書きもらし

(新撰大筑波)

のやうな不平も出るわけである。従つて、新增大筑波になると、この句に

世に弘めばや筆取といふ物

といふやうな句をつけ、「曆になき事此の書に多し」と説明してゐるやうな始末である。安倍晴明に假托せられる『靈鑑内傳金鳥玉兎集』は慶長の頃から盛んに刊行されるし、『大雑書』も寛永頃から頻りに版を重ねてゐる。

まくりを眺めこよみをば見ず

雑書箱、藥箱ともなりはてて

(獨吟千句)

古木せし梅は萬年曆かな

(毛吹草)

萬年曆も大雑書と同じ類である。

當時世上にあつた曆は所謂かな曆であつたが、これを基として作つた柱曆もあつたことは毛吹草の付合に「柱曆」とあることから知られる。これは月毎にまぐる物

だから、前の「まくり」とあるのは恐らくこれであらう。

地方の曆では伊豆の三島曆だけが盛んに出て来る。

あだめくは鰻のやうにぬめり歩き

三嶋曆か書きくどく文

(紅梅千句)

校しげき梅は三嶋の曆かな

(毛吹草追加)

三嶋曆は後世まで發行されてゐるが、それを見ずともこれ等の句から、その印刷面が想像出来るやうである。

曆の中の各季節及び年中行事が俳諧の題材となるのは當然であるが、三年に一度来る閏月も相當材料に用ひられてゐる。しかし

年の寄るしはすを伸ばす閏かな

(玉海集)

(師走一鼓)

七月の踊りを見する閏かな

(毛吹草追加)

(蹠は重履の意と、七月の盆踊の意とを兼ねる)

のやうにそれはただ月の重複といふことだけを問題にしてゐるのである。これは月蝕のやうな現象でさへも同様で、

しよくするやかたはら焦けたもち月夜

(慶筑波)

虫食むや今宵の月の桂の葉

(毛吹草追加)

の如く凡て言葉の言ひ懸けに止つてゐる。このことは「川之井」にも月の條に「月蝕は望にあめる事なれば、お

ほくは餅を食するに寄せ、また桂の葉の蟲食ひかとも言ひなす」と言つてゐる通りである。しかしこのやうな單なる言ひ懸けには過ぎないものの、月蝕を詠んだ句は非常に多いのであつて、これは恐らく一つには月蝕に對する世人の關心の度合ひを示すものであらう。従つて豫告した月食がなかつたといふやうな曆の誤りは甚だしく人に注目せられたであらうし、改曆の必要の感ぜられるやうになつた根底にはこんなことも一つの原因として横たはつてゐるのではないかと思はれる。

此の時代には南蠻人によつて西洋の天文説が持つて來られ、或る部分に對しては相當な影響を及ぼしたが、俳諧を作る人たちにとつては全く無關係であつたやうであり、そこで考へられてゐるのは凡て昔ながらの知識であつた。

地を潜りてぞ天へのぼれる

毎日の月日はおなじ月日にて

地の底をまはり響かや水の月

(新増大筑波)

(慶筑波)

のやうに古來の考へ方から少しも離れてはゐないのである。しかし流石に時代は時代である。あらゆる權威に盲従はしないといふのはこの時代を通じての一つの大きな

特色であつた。

いひたきやうにゆふ暮の空 (言ふ一タ)

七夕のあふを見つけた人もなし

(新增大筑波)

の如き句も所々に散見するのである。即ち將來新しい、より合理的な理論を取入れるべき素地は既にここに出来上つてゐるといふべきである。

尙ほ、天文、氣象等に關係する句を次に少し書き抜いて置く。

北斗をも頼まぬ月の御舟かな

(玉海集)

北向きて星や目あてに歸る雁

(毛吹草)

あきらけし四五月のしきう星

(玉海集)

月弓の放つ火矢とやよばひ星

(毛吹草追加)

雲の上なる掃除塵がし

(毛吹草追加)

國のただ亂れに出づるはふき星

(塵筑波)

鹽ひくも満つるも月の風かな

(塵筑波)

月を載せて引くや潮の車海老

(毛吹草)

離波あたりで虫や吹くらん

(塵筑波)

紀の海に突つ立ち見ゆる秋の虹

(塵筑波)

世を宇治川に浮かぶたう龜

(塵筑波)

我が庵は都のたつの巻き上げて

(塵筑波)

地をくぐりてぞ天へのぼれる

(塵筑波)

雨が水、水が雨とも成り變はり

(新增大筑波)

4

しかし此の時代の最も大きな進歩は外國からの新らしい器械の類の輸入によつて起つた。

なき人の日はくる／＼と廻り來て

車とけいを残し置く宿

(塵筑波)

毛吹草の付合の中にも「車」「土圭」といふのがあつた。時計はこれから後非常に人氣のある品物ではあつたが、その實用價值は勿論ごく小さかつた。寧ろ毛吹草にも「砂」「土圭」と見える砂時計は航海中舟の速さを測る場合に用ひられて却つて大きな役に立つて居た。

かねてばはむ(八幡)の用心ぞする

ひんがしに向ひてかくる遠目がね

(紅梅千句)

蚊柱のふとみや見する虫目がね

(玉海集)

遠目鏡は實用上にも役立つたが、恐らくは玩弄品として用ひられることが多かつたのであらう。蟲目鏡は實際に用ひる場合はなかつたのかも知れない。しかし鬼に角かやうな品物の輸入はかかる器械に對する興味を起させ、次第に實用に之を使ふやうになり、又器械そのものの發達も企てられるやうになつたのである。

これに比較すると磁針の輸入ははじめから實用的であ

り、その普及は著しかつた。

針手向けに夢に見えけり

方角や弘誓の舟に知れざらん

口ばしは磁石の針か歸る雁

(新增大筑波)

(山之井)

などは當時の人々の磁針に對する信頼の度と關心を示してゐるとも考へられるのである。

圖星をやただして針を立てぬらん

唐土へ舟を押し渡すなり、

今こそは知れ針の恩徳

いづくとか岩波高き舟とけい

(慶筑波)

(慶筑波)

舟とけいも恐らく羅針盤であらう。

かやうの種々の器械の普及は從來存在した器械類の進歩をも促して、此の時代は我が國の技術史の上に一轉機を劃することになつたのであるが、以下には技術に關係ある句を幾つか並べて見ることにする。

たしなめ多きかねのふしの木

この修羅は太鼓なくては引かれまじ

(紅梅千句)

毛吹草にも「修羅—石引」とあるやうに、これは重い物を引くための道具であつて以前より用ひられてゐた。

すぢりもちれる心むつかし

あふつりをからくる智恵や天下—

すぢりもちれる心むつかし

綾の機紋のつけやう初に見て

世をいとふ妻か月のかけほうし

かしこき智恵の廻り燈籠

(慶筑波)

(慶筑波)

(慶筑波)

5

以上の仕事の中で私は醫藥と疾病に關する事柄を述べなかつた。毛吹草の各地の産物中に挙げられた藥の數は非常に多いものであるし、各書の中醫藥と疾病を詠んだ句も本文中に記した事柄に對する句の總べてに匹敵する程の分量であるから、これは寧ろ専門の方に譲るが至當と考へたが故である。

尙ほ、俳諧の中に示されたからと言つて、それが當時の人の實見したものであると簡単に定めることの出来ないことには注意を要する。それは或は以前の言ひ傳へがそのままに單なる概念として通用してゐるのであるかも知れないからである。例へば毛吹草の付合には「塵琥珀」とありまた

花ぞ散る暖へや琥珀の玉椿

塵を取る露や琥珀の玉簪

塵の世に降るや琥珀の玉簪

(慶筑波)

(慶筑波)

(毛吹草)

等の句があるところから見ると、琥珀が塵を吸ふことは當時の人々の實見した事實であると考へることも出来るが、ただそれが支那の書物により、我が國人の知識になつたものであり、鎌倉時代以降『沙石集』其他の諸書に散見する事と併せ考へると、或はただ傳承された概念的な知識としてそれを持つてゐたのではないかとの疑惑も起つて来る。この類は他にも尙ほ少くないので、この點

に於て、我々は文學特に詩歌俳諧の類を科學史の資料とする場合、一つの制約を受けることになる。即ちそれだけで獨立して完全な資料となるには困難な場合があることを豫想しなければならないのである。

しかしそれにしてもこれが一つの新しい資料を提供するものであると言ふことが出来るであらう。